

主 題：すべてにまさるキリストと創造

聖書箇所：コロサイ人への手紙1章15－17節

テーマ：イエス・キリストが誰なのかを本当に知っていますか？

新年度最初の礼拝を通して学びたいみことばは、コロサイ1：15－17です。タイトルにもあるように、すべてにまさるキリストの偉大さやすばらしさを一緒に考えていきたいと思えます。具体的な内容に入る前に、まずいつものように聖書のことばをお読みします。15節からよく見てください。

コロサイ1：15－17

「:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」

さて皆さん、改めて思い返してみてください。私たちは今、パウロの書き記したコロサイ人への手紙を続けて学んでいます。何度も言うように、パウロは実際にコロサイの信仰者たちに会ったことはありませんでした。彼らの歩みを直接自分の目で見たことは一度もなかったのです。しかしある時、この教会を始めた人物であるエパfrasから、彼らが主に喜ばれる教会として歩んでいると知らされ、パウロは心から神様の働きに感謝していました。また、そんなコロサイの兄弟姉妹たちがますます主を個人的に知って、主にふさわしい者として成長し続けていくことを彼は祈っていたのです。間違いなくコロサイの教会には数多くのすばらしいことが起こっていました。しかし同時に、どんな教会にも言えるように、そんな彼らのうちにもさまざまな問題が生じていたのです。悲しいことに教会にはにせ教師たちが入り込み、間違った教え“異端”というものが人々の間で広まるようになっていました。具体的に入り込んでいた異端がどのようなものだったのかを特定するのは容易ではありません。でも私たちがこのコロサイの手紙を見ていけば読み取ることができるものも多々あります。例えば、偶像礼拝や神秘的な知識を教えるギリシャ哲学、またユダヤ的な伝統主義といった、本当にいろいろな誤った教えが教会には紛れ込んでいました。そして、それらが最初に伝えられたキリストの福音とは異なることを教えて、混乱を引き起こしていたのです。少し想像してみてください。例えば、教会の中である人たちはこんなふうに言うのです。「救われたいのですか？では、キリストを信じなさい。でもそれだけでは不十分です。あなたがたはキリストに加えて、割礼も受けなければいけません。以前行っていた儀式を行うことや食べ物や飲み物、祭りや安息日にといったユダヤの律法も守らなければいけません。そうでなければ救いに与ることはできないのです！」また別の人たちはこのように言うのです。「イエス・キリストですか？確かに彼は偉大な存在です。でも、まことの神様ではありません。いや、彼はまことの人でもありません。そんな方にだれかを救うことなど到底できるわけがありません。キリストだけでは不十分です！」と。もし私たちがこんな立場に置かれたらどうでしょうか？一番初めに「これが真実だ！」と聞いて信じたものと全く異なる教えが周りで広がり始めていけば、確実に混乱を招くと思いませんか？このようにしてにせ教師たちは教会を攻撃していました。正しい福音というものをねじ曲げようとしていたのです。「救いにおいても信仰生活においても、キリストは足りない。キリストは不十分な存在だ！」と教えていたわけです。信仰者たちの間には戸惑いが生じ、彼らの土台は揺り動かされていました。だからこそ、そんな現場を捉えたパウロは、それをそのままで良しとはしませんでした。実際に会ったことはないにしろ、同じ主を愛する兄弟姉妹たちに迫っている危険を覚えた彼は、彼らが一番立ち返らな

ければならない真理を手紙の中で示そうとしました。何に一番立ち返らないといけなかったか？それはもちろん、「イエス・キリストこそがすべてに於いて十分なお方である」という、この真理でした。

「キリストは十分ではない」という間違っただけの声に対して、「この方こそすべてにまさって偉大なお方なのだ！」と改めて訴えたわけです。「たとえ、いろんな間違っただけの教えが広まっていようと、正しいキリストの姿に心を留めて、その姿から決して離れないように。」と励ましていたのです。それがこの手紙の最大のテーマでもありました。また、これこそがきょう私たちが見る15節のところから記されている内容でもあるのです。15-17節を通して、パウロはイエス・キリストこそがすべてにまさる最高のお方であること、また、特に創造に関連してこの方の輝かしい偉大な三つの姿をここに描いていました。それこそが、いろいろな問題に直面して混乱していたコロサイの教会に与えられた最高の解決策でした。最も偉大なキリストの姿を覚えて、この方にすべてをゆだねて生きていくということ、これがどんなときも信仰者の歩みにとって欠かすことのできない土台だったのです。

もちろん、このことは今の私たちにとっても同じです。私たち自身も日々さまざまな問題や困難に直面することがあります。それは家庭においての問題かもしれないし、職場においての問題かもしれないし、だれかとの関係における問題かもしれないし、また、自分自身の信仰の歩みに関する問題かもしれないし、またそれだけではなく、私たちの周りを見渡してみてもイエス・キリストの偉大さを否定するような教えは変わらずに存在しているのです。そのような中で私たちが生きていくためにカギとなること、それは、いつもキリストの姿を正しく覚えることです。キリストこそがすべてにまさって十分なお方である、とそう自分のこととして知っていることです。改めてひとりひとりがよく考えてみてください。果たして私たちは本当にイエス・キリストがだれなのか、聖書が教えているそのイエス・キリストの姿を知っているのでしょうか？この方こそがほかの何よりも優れた、自分にとってのすべてなのだ、と、そう心に留めているのでしょうか？それとも、キリストではない別の何かに心を奪われていないのでしょうか？これから見ていくこのみことばが、それぞれにとって改めてキリストの姿を考え、いかにこの方が十分なお方なのか、いかにキリストが素晴らしいお方なのかをほめたたえるための助けと励ましになることを心から祈っています。

○すべてにまさるキリスト：輝かしい三つの姿

1. キリストはまことの神様 15 a

すべてにまさるキリストの輝かしい一つ目の姿について、パウロは15節に記していました。15節はこのように始まっています。「御子は見えない神のかたちであり」と。一つ目の輝かしい姿、それは「キリストはまことの神様だ」ということです。この方は「見えない神のかたち」でした。特に皆さんにここで注目して欲しいことばが二つあります。一つは、パウロが「御子は…神のかたちであり」「あり」と口にしていたことです。覚えていて欲しいのは、ここで「あり」という動詞に、継続を表す現在形が用いられているということです。パウロはここであえて「御子は神のかたちであった」と過去形で記したのではなく、「神のかたちであり」と現在形を使っていました。言い換えれば、神のかたちであるキリストの状態がいつまでも変わらずに続いているもの、継続的なものであるということをパウロは強調していたのです。ある時点では神のかたちで、ある時点ではそうでなくなってしまうと言っていたのではありません。キリストはすべての初めから変わることなく、いつもまことの神様として存在しておられるお方だということです。もちろん、そのことを聖書もいろいろな箇所でも繰り返して教えていました。例えば、ヨハネ1：1にはこのように書いてあります。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」また、ヘブル1：3には「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。…」と。ですから、イエス・キリストはいつも変わらず永遠に存在しておられる神様、まことの神のかたちでした。

でも、パウロが言っていたのはそれだけではありません。これに加えてもう一つ皆さんに注目してほしいのは、「かたち」ということばです。「御子は見えない神のかたち」とは、いったい何を意味しているのでしょうか？ここで用いられていた「かたち」といことばには、もともと「別の何かの姿や様子、特徴と同じものを表すもの」という意味が含まれています。要するに、キリストが「見えない神のかたち」だというのは、この方が間違いなく神様と同じ、神様の完全な本質を持ったお方である、ということをはっきりと明らかにしていたわけです。イエス・キリストは間違いなく神様だ、見えない神のかたちなのだと。

少し思い返してみてください。私たちが聖書を読んでいくと、だれも神様の完全な姿を見ることはできない、と聖書が繰り返し教えていることがわかります。例えば、かつて神様ご自身もモーセに向かってこのように言われていました。出エジプト記33：20を見るとこう書かれています。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」またパウロもテモテへの手紙の中でこう記していました。Iテモテ6：15-16「:15…神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、:16 ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることでできない方です。…」と。そもそも霊であり、目に見ることのできない、ましてや栄光にあふれた神様のそのすべてを人は決して目にするなどできませんでした。だれひとりとしてそれを見てなお生きていることなどできなかったのです。

しかし、そんな見えない神のかたちを完全に明らかにされた存在、それがイエス・キリストでした。この方はまことの神様として、神様がどんなお方なのかを人々の前で現された、というわけです。皆さんがよくご存じの箇所の中にこんなことばがありました。ヨハネ1：18「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を解き明かされたのである。」そしてまさにこのことば通りに、イエス様は地上での生涯を通して、ご自身がいったいだれなのかを人々の前で明らかにされ続けていました。だからこそ、イエス様をご自身のことを「わたしと父とは一つです。」と口にされた時、そのことばを聞いたユダヤ人たちは、いったい何をしようとしたでしょう？その様子がヨハネ10：29-33に描かれていました。「:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。:30 わたしと父とは一つです。」:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。:32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」:33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするではありません。冒涇のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」いったいどうして彼らは石を投げつけようとしたのでしょうか？それは、イエス様のことばの意味を彼らがよく理解していたからでした。彼らはイエス様をご自分を「神だ」と言われていることに気づいていたのです。だからこそ、「神を冒涇している！」と激しく怒って彼を殺そうとしました。また、もちろんイエス様はご自分の弟子たちに対してもご自身がだれなのかを明らかにされてきました。数年間をともにしてさまざまな力や奇蹟を目の当たりにし、なお「…私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」（ヨハネ14：8）などと口にされたピリポに対しても、イエス様はこう答えておられました。ヨハネ14：9-10「:9…「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」」皆さん、キリストは神様のようなお方ではありませんでした。この方はすべての初めから変わることはない神様そのものでした。この方は神様の本質の完全な現れだったのです。たくさんいる中のひとりの優れた預言者でもありません。さまざまな良い教師の中のひとりでもありません。最高の御使いのひとりでもなければ、神様に限りなく近いような存在でもありません。この方は疑いようも

なく栄光にあふれた神様ご自身でした。この方こそ、世界のすべてを創造する前から永遠に存在しておられた神様、まことの神のかたちだったのです。皆さん、これが聖書が教えている御子の姿でした。イエス・キリストはほかのだれでもない、まことの神様でした。ほかに並ぶもののない圧倒的な力を持っておられるお方でした。全知全能の、聖く正しく愛にあふれ、恵みに富んだ神様でした。

パウロはその揺るがない真理をコロサイの信仰者たちに思い出させていました。“いったいキリストはだれなのか” そんな間違った教えが広まり、混乱が人々の間で生じているその中で、「キリストこそが神だ！」と初めに訴えたのです。イエス・キリストがまことの神様であるということ、それはコロサイの信仰者たちが確信を置き続けることのできる揺るがぬ真理でした。このお方こそが彼らにとってのすべてでした。そしてもちろん、その栄光にあふれた神様こそ、今を生きる私たちにとっても身をゆだねることのできる十分なお方になるのです。果たしてこのようなキリストの姿を私たちは覚えているでしょうか？

2. キリストはすべてを造った最高の権威者 15b-16節

続けて、すべてにまさって偉大なキリストの二つ目の姿が15節の続きから記されていました。「:15…造られたすべてのものより先に生まれた方です。:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」二つ目の輝かしい姿、それは「キリストはすべてを造った最高の権威者だ」ということです。キリストはすべての権威者でした。でもこの箇所を読んだときに、パウロが「御子は「造られたすべてのものより先に生まれた方です。」」と述べていたことに気付いた方があるかもしれません。「先に生まれた方」と訳されていることばは、「最初に生まれた子ども」とか「初子」とも訳すことのできるものです。でもある人はこれを読んで、「あれ？キリストはほかのものよりも先に生まれた存在なの？」「この方は一番最初に造られて誕生した存在なの？」と思われたかもしれません。実を言うと、これまでの歴史においても、特に15節の後半部分というのは、数々の間違った解釈がなされてきた箇所の一つでもありました。例えば、4世紀初め頃に登場したアリウスと言う人物はこの箇所をとって、イエス・キリストの神聖を否定したのです。彼は「先に生まれた」ということばを曲解して、御子は父なる神によって一番最初に造られた存在だ、と教えていました。永遠に変わらない神様ではなく、イエス様は造られた存在だと教える異端もありました。そんな大昔ことは私には関係ない、と思った方があるかもしれません。でもこれは大昔の話でもありません。今の時代にあってもエホバの証人などはこの箇所を用いて、キリストは神様ではない、神様によって造られた被造物なのだと教えていたりもします。では皆さん、このことばを記した張本人であるパウロはいったい何を言わんとしていたのでしょうか？彼は、イエス様は最初に造られた存在だ、と教えようとしていたのでしょうか？もちろん、そうではありません。少し周りの文脈を考えてみてください。先に私たちは15節の前半部分を見ましたが、パウロはそこで何を教えていました？キリストがまことの神様であると教えていました。そんな彼が続けて「キリストは神様によって造られた被造物だ」などと言うはずはないのです。文脈を少し考えてみれば、御子が最初に造られたもの、などという読み方はあり得ません。この方は確かに栄光にあふれた神様ご自身でした。

ではいったい、御子が「すべてのものより先に生まれた方」というのは、どういう意味を持っているのでしょうか？何を言わんとしているのでしょうか？ここでカギになるのは、この「先に生まれた方」「初子」ということばの使われ方です。これだけはよく覚えておいてください。このことばは、後とか先とかといった時系列を表すこともできますが、それ以上に「先に生まれたものの持つ優れた権威や特権を表すのに使われていた」ということです。つまりだれが最初に生まれたのかという話ではなくて、だれが一番優れた地位にあるのかということを強調していたということです。でも、「まだ何かこのことばの意味があまりわからない。」と言う方があるかもしれません。では、聖書から具体例を二つ見てみましょ

う。一つ目は出エジプト記の4章特に22節を見るとこのように述べられていました。出エジプト4：22「…【主】はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。』」これはどういう意味でしょう？よく考えてみてください。イスラエルは一番初めに誕生した国ではありません。イスラエルが生まれる前にもいろんな国は存在していました。ですから、時間的順序の話をしていたのではありません。主が「イスラエルは…わたしの初子」と言われたとき、それはイスラエルが主の前に最も重要な地位、特権を占めている、ということを表していました。イスラエルが主にとって特別な選ばれた立場にあるということ、それを「初子」「先に生まれた方」ということばは強調していたというわけです。もう一つこれと同じ使われ方を詩篇の中でも見て取ることができます。詩篇89篇特に27節で、今度は神様がダビデに関してこのようなことばを残していました。「わたしもまた、彼をわたしの長子とし、地の王たちのうちの最も高い者としよう。」と。神様はダビデをご自身の「長子」「初子」とされました。でも皆さんもよくご存じのとおり、実際には彼はエッサイの家系にあって、長子ではありません。むしろ彼は8人兄弟のうちの末っ子だったのです。ですからやはり、これも時間的順序の話をしていたのではありませんでした。主がダビデを「長子と」すると言われたとき、それは彼がほかのどんな王様よりも優れた地位を占めることを表していました。ダビデが主にとって特別な選ばれた王様であるということ、それを「長子」「先に生まれた方」ということばは強調していたわけです。そして、これこそまさにパウロがコロサイの中で言わんとしていたことでもありました。キリストが「…すべてのものよりも先に生まれた方」であるというのは、この方がすべてのものよりもはるかに優れた、はるかにまさるその地位を占めておられるということ、最高の権威者であるということを表していたのです。造られたすべてのものにまさるお方、すべてのものにまさって偉大なお方、それが、聖書が描いているキリストの姿でした。

ここで立ち止まってよく考えてみてください。果たして私たちは本当にこのキリストの姿を信じているのでしょうか？もちろん私たちは口ではいくらでも「イエス様はすべてにまさって偉大です。何よりも大切な存在です。」と言うことはできます。でも実際に、私たちはそのキリストを知っている者にふさわしい生き方をしているのでしょうか？自分の歩みを少し振り返ってみてください。果たして私たちは、どんなときもキリストが一番の存在だと知っているからこそ、そのように扱っているのでしょうか？キリストがすべてのものにまさって偉大なお方だと知っているからこそ、この方が何よりも最も重要な存在であると知っているからこそ、何をしてもこの方をそのように扱っているのでしょうか？何をしてもこの方を求めているのでしょうか？すべての中心にキリストが存在しているのでしょうか？それとも、何か別の大切なことのない存在かのようにキリストのことを考えて、キリストをまるで重要でないもののように扱っていたりしないのでしょうか？皆さんが自分自身に問いかけてみてください。キリストではない何かをキリストよりも一番に置いていないのでしょうか？一時的な満足かもしれません。この世の楽しみかもしれません。そういったものを何よりも求めていたりしないのでしょうか？みことばは教えていました。キリストはすべてにまさって偉大な地位におられるお方だと。あなたにとってキリストは最高の権威者でしょうか？

でも、ある人はこのように思ったかもしれません。…どうしてキリストがすべてにまさって偉大なお方なのでしょう？そもそもどうしてこの方を最高の権威者として扱わないといけないのでしょうか？もしそのように思ったなら、もう一度パウロのことばをよくみてください。彼は続く16節でその理由を説明していました。16節を見るとこう書いていましたね。「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」はっきりと記されていました。イエス・キリストがすべてのものにまさって偉大な理由、それは、この方が万物を造られたお方だからでした。例外は一つとしてありません。この世界のすべてのものは、ほかのだれでもない

御子によって創造されたのです。天にあるもの、地にあるものもそうです。太陽や月や惑星や数え切れないほどの星もそうです。広大な土地も海もたくさんの植物や動物も、また私やあなたもそのすべてに至るまでこの方が造られました。また私たちの目に見えるものだけではありません。目に見えないものも同じです。この世界に存在しているありとあらゆるものが、大きいものから小さいものに至るまで、王座や主権、支配や権威といった霊的な力も、また天使や悪霊といった存在に至るまで、この方はすべてを造られました。この方はご自身のためにすべてを造られました。私たちが周りを見渡したときに存在するすべてのものは、私たちのためではありません。この御子のために造られました。私たち自身もこの御子のために、神様の栄光を現す者として造られました。だからこそ、キリストはすべてにまさって最高の権威者でした。この方こそ、文字通りすべてのものを支配しておられる、ほめたたえられるべきまことの創造主でした。これが聖書の教えている御子の姿です。

パウロはそんな揺るがない真理をコロサイの信仰者たちに思い出させていました。“いったいキリストはだれなのか”という誤った教えが広がっているその中であって、「キリストこそがすべてを造られた最も優れたお方なのだ！」と訴えていました。イエス・キリストが最高の権威者であること、それはコロサイの信仰者たちが確信を置き続けることのできる揺るがない真理でした。そんなお方こそが、彼らにとってすべてだったのです。そしてもちろん、そのお方こそ、今を生きている私たちにとっても身をゆだねることのできる十分なお方です。どうでしょう？このキリストを私たちは正しく覚えているでしょうか？

3. キリストは永遠に変わらない主権者 17節

そして最後、すべてにまさるキリストの輝かしい三つ目の姿が17節に記されていました。「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」三つ目の輝かしい姿、それは「キリストは永遠に変わらない主権者だ」ということです。まずここで「御子は万物よりも先に存在したお方なのだ」と言われていました。言い換えれば、この方はすべてのものが生まれる前から変わることなくおられた存在だ、ということ。この地上に人として来られる前は、イエス様は一切存在していなかったわけではありません。この方には始まりも終わりもありません。すべての初めからどんなときも変わることなく永遠の神様として存在しておられるお方だったのです。イエス様ご自身もこう言われていました。ヨハネ8：58「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」」と。ですから、キリストは人として現れるその前から永遠に存在しておられたお方でした。

でもこの永遠に存在しておられたお方は、同時にすべてのものを支えておられるお方でもありました。小さなものから大きなものに至るまで、万物はイエス様の力によって成り立っているのです。「万物は御子にあって成り立っています。」と。これはすばらしい約束でした。キリストは単に世界のすべてのものを造ってそれでおしまい、ではなかったということです。その後は何もせずにじーっと眺めておられるのではなかったということです。この方はすべてのものを造って、すべてのものを今も変わらずに保っておられる主権者でした。あらゆるものをご自分の意のままに造ることのできるお方が、ご自分の意のままに保つことができると。そんな偉大な力を持ったお方、それがこのキリストでした。最初にも見たヘブル1：3にもこのように記されています。「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。…」一部とは書いていません。「万物」と。「すべてのものを保っておられます」と書かれています。

考えてみてください。この世界のすべてを造られて、一番初めから今の今に至るまで、この先も変わらずに保ち続けることのできるお方の力というのは、いったいどのようなものなのでしょう？いったいどれほど偉大なものなのでしょう？どれだけ信頼できるものなのでしょう？何より感謝なことは、キリストはこの世界のすべてのものを保っておられるのと同じ力でもって私たちひとりひとりの歩みをも支えてくださ

る、ということです。決して忘れてはいけません。私たちが今生かされているのは当たり前のことではない、ということです。ただ、すべてを支配しておられる方の恵みでしかありませんでした。ヨブ記の中にもこんなことばが記されています。ヨブ34：14－15にこう書いていました。「:14 もし、神がご自分だけに心を留め、その霊と息をご自分に集められたら、:15 すべての肉なるものは共に息絶え、人はちりに帰る。」言われていたのは明白です。私たちのいのちは、ただ神様にかかっているということです。私たちの周りのものがそれに影響を与えるではありません。私たちのすべては神様にかかっているのです。この方がそれを取り去られるのなら、みな「ちりに帰る」ということです。だからこそ、今生かされているのはただ主のあわれみでした。しかしそんな私たちはいつも覚えることができます。キリストがすべてのものを造られ、すべてのものを造られたこの御方は、すべてにまさって偉大で、今もなおすべてのものを支配しておられるということです。すべてのものをご自分のために造られたお方は、ご自分のためにすべてのものを保っておられるのです。どんなものにもまさる力を持ったお方が、今も変わらず私やあなたの人生の中に働いて、いつも保っていてくださるということです。このようなお方がともにいてくださるというわけです。

だとすれば、私たちはどんなときも安心だ、この方にとって私たちは大丈夫だと思いませんか？確かに私たちの歩みには、困難なことや予期せぬことが数多く起こるかもしれません。しかし何があつたとしても、この主が知らないような、この主の手には負えないような問題など一つとしてありません。確かに私たちの歩みにはいろいろな苦しみや罪との戦いがある、葛藤や敗北を経験することもあるかもしれません。しかし何が起こったとしても、この主には私たちを変わずに支えてくださる力があるのです。そんな永遠に変わることはない主権者が、すべてのものにまさっておられるその偉大なお方が私たちともにいてくださり、私たちはその方に拠り頼んで生きていくことができるというわけです。この世界を造られてこの世界のすべてをご自分のために保っておられるその方の力を、私たちは決して小さく見てはいけません。どんなお方に私たちは拠り頼むことができるのかを、どんなお方に私たちはほめ歌を歌うべきなのかをいつも覚えておくことです。このような主の姿を覚えるなら、私たちはいったいだれに自分の身をゆだねて日々歩んでいこうとしましょうか？このように輝かしいキリストは、あなたにとってどのような存在でしょう？自分が必要とするときだけは求めて、それ以外のときは忘れてしまうような存在なのでしょうか？それとも、どんなときも私たちが心を留めるべき、すべてのものにまさって偉大な最高の存在でしょうか？

皆さん、パウロはコロサイの信仰者たちに思い出させていました。“いったいキリストはだれなのか”という間違っただけの教えが広まっていく中で、「キリストこそが永遠に変わらない主権者なのだ！」と訴えていました。間違いなく、人々の間にはいろんな困難が生じていたことでしょう。にせ教師たちの教えに惑わされて信仰の土台が揺らいでいた者たちも数多くいたでしょう。しかしそんな兄弟姉妹たちに対してパウロは、キリストだけで十分なのだと教えていました。まことの神様であり、すべてを造られた最高の主権者であり、永遠に変わることはない主権者、そのようなイエス・キリストを。この方だけが、救いにおいても、信仰生活においてもすべてなのだ、と思ひ起こさせ続けたわけです。そして、それだけがコロサイの信仰者たちも聞かなければいけないメッセージでした。

では、今の私たちはどうでしょう？御子の姿は今も昔も変わってはいません。この方は変わらず、ほかに並ぶものがない圧倒的な力を持っておられる神様、すべてを造られた最高の権威者、そしていつまでも変わることはない主権者なるお方なのです。果たしてこのような主の姿を本当に知っているのでしょうか？本当に、キリストだけが自分にとって必要な存在だと信じているのでしょうか？

もし、まだ偉大な主を自分のこととして知らない方がいるなら、知っていてください。そんなあなたは今罪の中に死んでいて、永遠の滅びへと今まさに近づいているということなのです。聖く正しい、罪を必ず正しくさばかれるその神様の前に立つ日はやって来るということです。でもまだ救いはあります。

だから「きょう」というこの日に、私やあなたのような罪人のためにご自分のいのちをささげてください。そのお方、あなたを罪から救うことのできる唯一のお方に助けを求めてください。ご自分の罪を悔い改めて、主イエス・キリストを自分の救い主と信じ受け入れてください。私たちの良い行いも、知恵も自分を救うことなど絶対にできません。だからこそ、ただキリストの死と復活による赦しを求めてください。ありえないほどの犠牲を払ってくださって喜んで十字架の死にまでも従われた、そんな偉大な救い主をあなたも心から信じるなら、救いを与える、と神様は約束してくださっています。どうかこの救いを、この救い主を自分のものとしてください。

また、もうすでにこのキリストを知っているという皆さん、もう一度自分自身に問いかけてみてください。果たしてイエス・キリストはあなたにとって十分な存在でしょうか？イエス・キリストがほかの何よりも優れた自分にとってすべてのお方なのだと、心で本当に認めているでしょうか？この方にのみ心を留めて生き続けていこうとしているでしょうか？それとも、別の何かに心を奪われてしまって、最高のものではないものに目を留めて生きていこうとしていないでしょうか？よく考えてみてください。私たちは本当にキリストの姿を正しく覚えているでしょうか？皆さん、私たちが仕えているお方は、力のない数多くある神と呼ばれるもののひとりではありません。キリストこそ、すべてにまさって偉大なお方です。私たちのすべてのものを犠牲にして仕えていくべき、輝かしい、すべてまさるお方です。栄光にあふれたこの方こそ、私たちのすべてをささげても賛美をもって仕えていくのに値するお方なのです。新しい年度は始まりました。このように偉大な輝かしいキリストにどんなときも心を留めて、この方をますます知って、この主を愛する者としてともに歩んでいきましょう！